

18	豊田	堤小学校	カトウ タケヒロ 氏名 加 藤 丈 寛
分科会番号	14	分科会名	特別支援教育

研究題目 協力して前向きにせっけんづくりに取り組み、商品の魅力を人に伝えようとする子の育成
— 「ぴかぴかなかよしせっけんを作ろう！」の学習を通して —

研究要項

1 主題設定の理由

障がいをもつ方が働く事業所では、その事業所にしかない特色ある商品を製作し、販売している。一例として、「豊田市さくらワークス」ではクッキーの製作を行っている。自動車部品製作の技術を生かした精巧な表現を施した造形美と、素材を生かした無添加の味が特徴である。本校では、児童が協力して商品をつくり、保護者や教員に販売をする「なかよし〇〇屋さん」の活動を行っている。お金をもらうに値する商品を作るために、児童それぞれができることを生かして商品づくりをしたり、商品として売り出すためにきちんと検品したりといった点を重視して活動を行ってきた。過去には古紙を使ったメモ帳や、マスクケース、コースターなどを製作・販売した。児童たちは黙々と作業し、一生懸命に商品づくりをしていた。しかし、商品の魅力を捉え、セールスポイントとして語れる児童が少なかった。

そこで特別支援学級の自立活動の単元で、児童にとって実用的で、性能がよく、嬉々としてセールスポイントを語れるような商品を作る実践を検討した。汚れがよく落ちるせっけんを製作し、商品の良さを体感できるようにしたいと考えた。商品のよさを捉えることで、自信をもって保護者や教師におすすめポイントを語れるようにしたい。また、製作の中で困り感があるときに児童が自ら担任に相談し、適切に支援を受けて困難を乗り越えられる環境をつくり、自分たちの力でせっけんを作ったという確かな実感がもてるようにしたいと考えた。

2 研究の方法

(1) 目指す子ども像

協力して前向きにせっけんづくりに取り組み、商品の魅力を人に伝えようとする子

(2) 研究の仮説と手立て

【仮説1】せっけんを協力して自分たちの力で製作し、完成させたことが実感できれば、せっけんの魅力をすすんで伝えようとするだろう。

<手立て1>

わかりやすい工程、簡単な操作でせっけんを製作できるようにし、子どもたちが「自分たちの力で作ったせっけん」であると実感できるようにする。

<手立て2>

製作の中で困ったとき、適切に支援者のサポートを受けることができる「まほうのこ とば」を用意し、友達や教師、学級運営補助指導員の力を借りながら、みんなで力を合 わせて商品づくりができるようにする。

【仮説2】せっけんを使ったシューズ洗いの活動を通してせっけんの機能を知れ ば、その魅力をすすんで伝えようとするだろう。

<手立て3>

完成したなかよしせっけんで自分のシューズを洗う経験を通して、なかよしせっけん の機能を体感できるようにする。

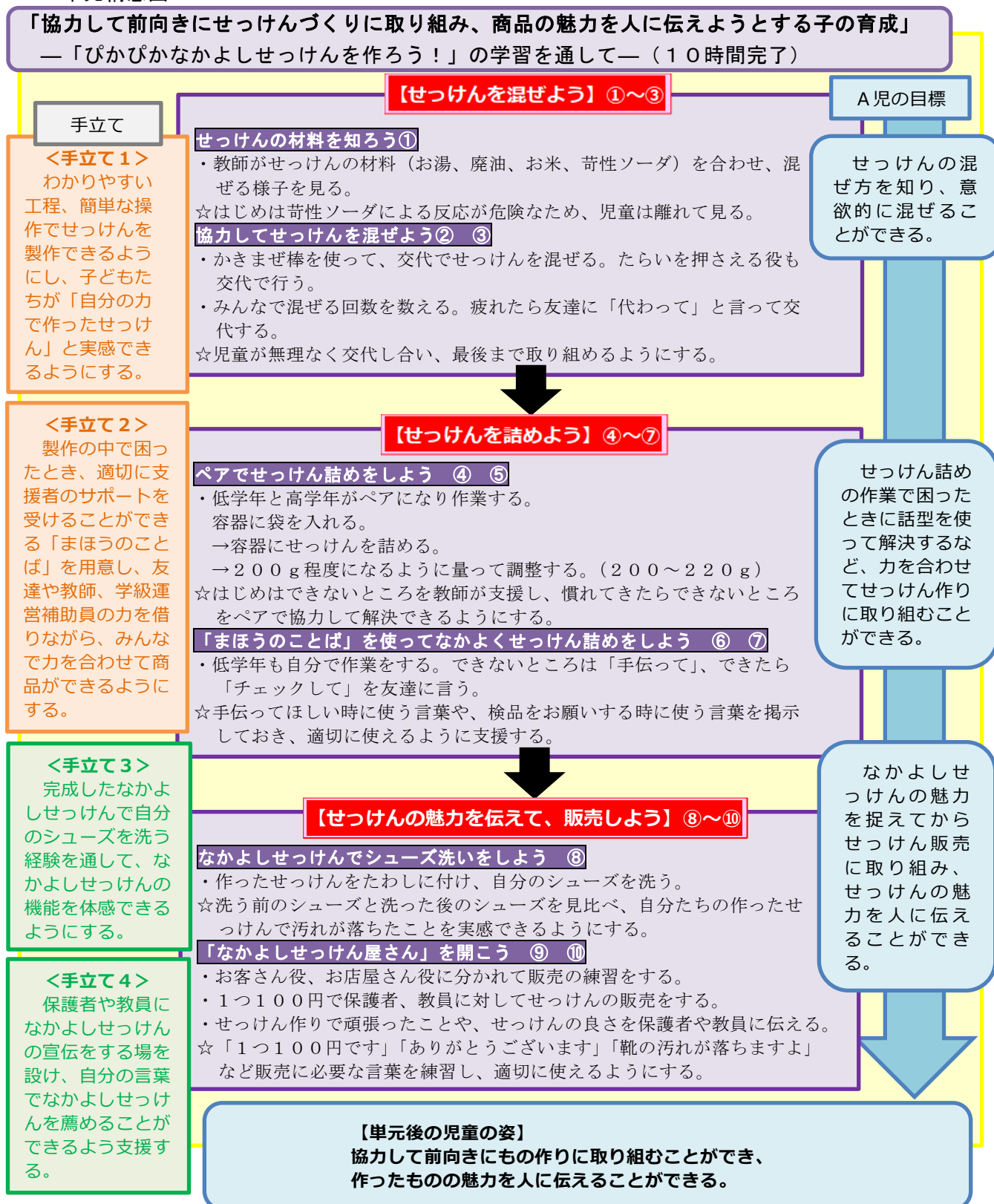
<手立て4>

保護者や教員になかよしせっけんの宣伝をする場を設け、自分の言葉でなかよしせっ けんを薦めることができるよう支援する。

3 抽出児A（6年生・男）について

単元前のA児の姿	学習を通して付けたい力
・自分から進んで人に声をかけることが苦手であり、言葉が出ずに固まってしまうことがある。 ・家族に学校での活動を話すことはあまりなく、コミュニケーションが少ない。	・困ったときは担任に相談し、下級生に対しては優しく声かけができるようになってほしい。 ・家族や先生に商品の魅力を伝えられるようになってほしい。

4 単元構想図



5 研究の実際

(1) わかりやすい工程で、自分たちの力でせっけんを作る <手立て1>

① 協力してせっけんを混ぜよう

「せっけんの材料を知ろう」では、児童たちにせっけんの材料を説明した後、危険が無いよう少し離れたところでせっけんの調合の様子を見せた。お湯、粘りをつけるための白米、熱した油、苛性ソーダを順にたらいに入れていく。油を入れると、ぱちぱちと油が跳ねる様子に児童たちは興味をもって見ている様子があった。苛性ソーダを入れるとけん化反応があり、溢れんばかりの白い泡が立つと、児童たちは「すごい」「もこもこだ」と驚いていた。

「協力してせっけんを混ぜよう」では、せっけんを繰り返し混ぜ、材料がきちんと混ざり合い、時間がたっても分離しないせっけんを作ることを目指して作業をした。児童たちもたくさん混ぜることが良いせっけんの完成に繋がることを知り、一生懸命混ぜ始めた。初日はせっけんがさらさらしていて混ぜやすいが、2日目には一気に固くなり、特に低学年の児童にとっては混ぜるのが難しくなった。そこで、低学年の児童は10回混ぜたら交代、高学年の児童は10回より多く混ぜるという作業のルールを決め、みんなが無理なく作業できるようにした。混ぜるのに苦労する下級生を応援しながら、**資料1**のように「1. 2. 3…」とA児が数を数える様子が見られた。



資料1 A児が「1. 2. 3…」と数えながら行うせっけん混ぜの様子

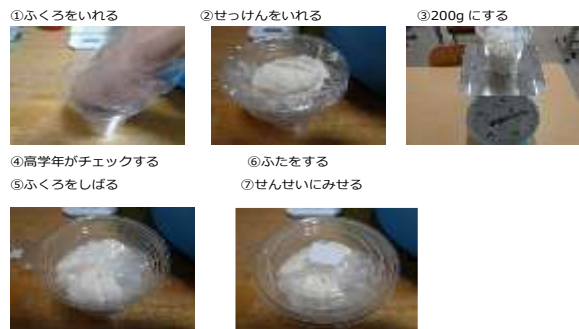
② せっけんを詰めよう

「せっけんを詰めよう」では、混ぜ終えて寝かせたせっけんを、プラスチックの容器に詰めていった。商品としての均一の価値を保てるよう、1つの容器に200g程度(200g以上220g以下)になるように量り、せっけんを詰め、検品も行った。作業工程は、写真を用いながら順に示し、児童がわかりやすいようにした。

初めて作業をする際は、全員が同じ工程を同時に行った。袋を容器に入れる時の手の動かし

方、量る時の目盛りの見方、容器にふたをする時に「ぱちっ」と音がするまで力を入れて押すことなどを確認した。次にペアで作業を行った。基本的には上級生と下級生がペアになり、下級生がうまくできないところを上級生がサポートする体制をつくった。

A児は工程を**資料2**のように1つずつ確認したことで作業の仕方の一部始終を把握し、1人でできるようになった。しかし、ペアの下級生に対してすすんで声をかけることができず、下級生が工程を間違えたり容器にせっけんが付いてしまったりしても助言できず、結果としてペアで提出したせっけんが検品で引っかかってしまうことがあった。



資料2 A児が確認したせっけんの詰め方の掲示

(2) 「まほうのことば」を使いながら、協力してせっけん作りをするA児 <手立て2>

せっけん詰めめの活動をスタートしてから、自分一人でせっけん詰めができる児童と、支援者や友だちのサポートが無いと正しく詰められない児童を把握した。A児は自分で作業ができるため、一人では製作が難しい低学年の児童とペアにした。前述した通り、初めはうまく声かけやサポートができず、困ってしまうことが多かった。A児が困ったタイミングで**資料3**のように「まほうのこと

「てつだって」「～できない」「～して」
「チェックして」「ふやして」「へらして」
「教えてください」「どうしたらいいですか」
「～でこまっています」

資料3 A児が使った話型「まほうのことば」

ば」として、作業中に使える話型を提示した。作業の中で必ず必要な声かけに加え、困ったときに使える言葉を伝えた。

作業をする児童たちはすすんで「まほうのことば」を使うようになった。低学年はせっけんの量が正しいかを確認してもらうために、高学年の児童に対し「チェックして」を繰り返し使った。高学年の児童はそれに対し、「もう少し増やして」「もう少し減らして」と話型を使いながら、**資料4**のように正しい量になるようアドバイスをしていた。また高学年の児童の中で特に話型を使いこなしていた児童は、「袋をねじるのがうまくいなくて、袋が汚れちゃって困っています」など、具体的に困っていることを説明して教師をうまく頼ることができていた。



資料4 A児が「もう少し増やして」の話型を使ったせっけん詰め

A児は、「増やして」「減らして」といった低学年への声かけはすぐにできるようになった。話型を提示する前は、何と声をかけてよいのかわからずに静かに作業していたため、これは大きな成長である。けれども、教師を頼る言葉はすぐには使えなかった。せっけんがこぼれてしまった時など明らかに困っていることがあっても、目で合図を送ってきて、声を出さずに助けを求めようとしていた。そこで、A児を初めよりも近くで見守り、「困ったことがあったら何でも言ってね」と声をかけた。すると、作業の後半で容器にせっけんが付いてしまった時に、**資料5**のように、「これ、どうしたらいいですか」と指を指して言うことができた。ティッシュペーパーでぬめりが取れるまで拭けば解決することを伝え、一緒に拭いた。すると次からは自分で拭くようになり、下級生にも拭き方を教えていた。その後も「先生、チェックしてください」「ふたが閉まらなくて困っています」など話型を使うことができ、話型を使うことで安心して、自信をもって作業に取り組める様子が見受けられた。

T：「困ったことがあったら何でも言ってね」

A児：（指を指しながら）「これ、どうしたらいいですか」

A児：（容器を持って）「先生、チェックしてください」

A児：（ふたを持って）「ふたが閉まらなくて困っています」

資料5 授業記録からのA児の様子

(3) シューズ洗いでせっけんの魅力を体感する児童たち <手立て3>

① なかよしせっけんでシューズを洗おう

完成したせっけんで自分のシューズを洗う学習を行った。事前に児童たちに家でのお手伝いについて聞いてみると、「はしを並べています」「机拭きをしています」「タオルをたたんでいます」といった発言があった。一方で、シューズや靴を洗ったことがある児童は少なかった。うまくできるかわからないという意見もあった。お手伝いに関しては、「家でもポスト係をやっています」と言う児童がいて、学校での係活動が家でのお手伝いに結びついているようだった。机拭きやコロコロでの床掃除などを家でしている児童も、学校での掃除で学んだノウハウを活かしているようで、学校で体験したことは「おうちの人に話したい」「家でもやってみたい」に繋がること確信できた。

シューズ洗いは、**資料6**のように柄付きたわしを使って中庭の水場で行った。たわしの先にせっけんを付け、初めにシューズの裏側をこする。次にシューズの中や側面の黒くなっているところを狙ってこする。こするのに少し力が要るので、児童によっては水道のシンクにシューズを置いて、置いた状態でこするなどした。シューズの裏側は特に汚れが落ちやすく、上手にこすった子はシューズの色の変化で、きれいになったことを明確に認識することができた。「白くなった」「新品みたい」と感動するA児の声を聞くことができた。



資料6 A児が「白くなった」「新品みたい」と言いながらしたシューズ洗いの様子

また、シューズ洗いに加え、高学年の児童は大掃除で校内の水道を掃除するのになかよしせっけんを使い、水垢を落とす経験をした。水垢が取れるということは家のシンクや風呂場の掃除にも使える、と気付く子もあり、使い道を色々と考えることができた。

② せっけんの魅力を語りたくなった児童たち

シューズ洗い体験後に児童たちから、「家でもシューズ洗いをやってみたい」「シューズ洗いができるところをおうちの人に見せたい」という声があった。市販のせっけんを使って家でやってみたという児童もいたが、せっけんが泡立ちづらかったり、思うほど汚れが落ちなかったりして学校でやったことの再現ができなかったようであった。そこで、なかよしせっけんを保護者向けに販売すれば、家でなかよしせっけんを使うチャンスがあることを再度伝えた。当初はせっけんを教員や保護者に販売し、その収益で遠足に行くことを目標としていた。しかし、シューズ洗いを通してせっけんの魅力を実感した児童は、保護者への販売活動を通して今度は「自分たちの分のせっけんを手に入れること」を新たな目標として掲げるようになった。児童に、「せっけんを買ってもらうには、どんなふうにせっけんを紹介したらいいかな」と質問し、児童が自分の言葉でなかよしせっけんのよさを伝えられるようにした。なかよしせっけんの機能を体感した児童からは、「汚れが落ちるよ、と伝える」「シューズがぴかぴかになるよ、って宣伝します」といった意見があった。また、6年生の児童の1人が、洗う前のシューズの写真と洗った後のシューズの写真をちらしに掲載して、なかよしせっけんの凄さを伝えようと提案した。これを実際に、**資料7**のように注文用紙に掲載し、配布することにした。



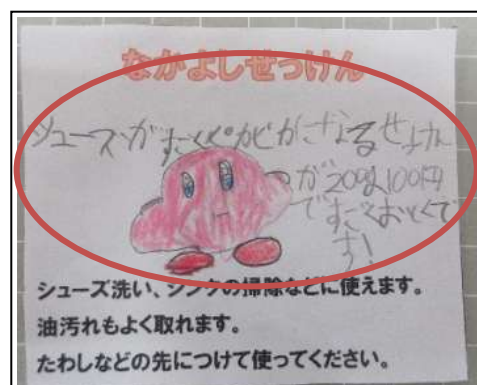
A児は普段家であまり学校の話をしていないが、注文用紙に掲載された写真を見せながらシューズ洗いのことを保護者に伝えていた。具体的にどのように洗ったかなどの説明は難しくてしなかったようだが、洗ったシューズを母親に見せ、なかよしせっけんを買ったら家でも洗ってみたいという意思を語っていた。

(4) せっけん販売でせっけんの魅力を伝えた児童たち <手立て4>

① キャッチコピーを考えよう

せっけん販売をするために、せっけんに貼るラベル作り、ラベル貼り、販売ちらしの作成や販売に必要な言葉の練習を行った。販売ちらしは教師が作成し、児童たちは**資料8**のように、せっけんに貼るラベルにイラストや、せっけんをおすすめする言葉としてキャッチコピーを書いた。イラストは自由としたため、キャラクターなどを描く児童が多かったが、シューズ洗いの様子やぴかぴかになったシューズの絵を描く児童もいた。キャッチコピーは、「汚れが落ちます」「シューズがぴかぴかになるよ」といった言葉が出て、「これらが販売時の売り文句としても使えるね」という話になった。A児は、「シューズがすごくピカピカになるせっけんが200g100円ですごくおとくです!」とラベルに書いた。

さらに、せっけんを使った水道の水垢掃除を経験した児童からは、「水道の掃除にも使えるよ」「カビがきれいに取れるよ」という言葉も出てきた。それに加え、「せっけんの販売に来ました」「1つ100円です」「ありがとうございます」など必ず必要になる言葉を練習した。キャッチコピーは児童の考えた言葉に任せ、販売に必要な言葉の多くは話型を作り練習するようにしたことで、A児も安心して言葉を練習していた。



② 保護者や交流担任にせっけんを販売したA児

校内の教員に向けて、なかよしせっけんの販売ちらしを配布した。ちらしは特別支援学級の児童が、交流学級の担任に届けるようにした。届ける際にせっけんの紹介をし、商品をお薦めする言葉を伝えるようにした。A児は自分のシューズを洗った時にシューズがぴかぴかになったことを交流担任に伝えることにし、それをキャッチコピーにすることにした。**資料9**のように実際に交流担任のところに行くと、A児は話し始めるまでは緊張した様子であったものの、話し始めると話型をうまく使い、はっきりと話すことができていた。そしてキャッチコピーのところでは、**資料10**のように、「ぼくは自分のシューズを洗って、黒かったのが白くなって、ぴかぴかになりました」と話すことができ、交流担任は「うちも子どもがいるんだけどね、シューズ洗いがいつも大変だから、欲しいな」と答えてくれ、やりとりをして販売につなげることができた。



資料9 A児と交流担任との
せっけん販売の様子

保護者への販売については、ちらしを配布して家庭で児童がせっけんをお薦めし、購入する人はちらしに添付した注文用紙を提出するという形で販売した。児童の送り迎え等で学校に来る保護者に対しては、児童が教室で直接やり取りして販売を行った。A児の保護者は学校に来ないため家庭での販売の形になった。A児からシューズがぴかぴかになったこと、家でも自分と弟のシューズを洗ってみたいと伝え、保護者へ販売することができた。

A児：ぼくは自分のシューズを洗って、黒かったのが白くなって、ぴかぴかになりました。

交流担任：うちも子どもがいるんだけどね、シューズ洗いがいつも大変だから、欲しいな。

A児：お買い上げありがとうございます。

資料10 A児と交流担任の関わりの様子

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

【仮説1について】

わかりやすい工程、簡単な操作でせっけんを製作できるようにしたことで、児童たちはなかよしせっけんがただのせっけんではなく、自分たちで頑張って作ったせっけんと感じることができた。製作中、は必要な言葉を話型から選んでうまく使えた児童が多く、適切に友達や支援者とコミュニケーションを取りながらせっけん詰めを行うことができた。A児は困ったときに「これ、どうしたらいいですか」と声を出して担任に相談できた。最後まで友達と協力し合ってせっけん詰めができたA児の様子からも、仮説1の手立ては有効であったと考える。

【仮説2について】

シューズ洗いの活動を通し、実際に自分たちで作ったせっけんでシューズの汚れを落としてみたことで、せっけん販売への意欲が高まった児童が多かった。A児は家でもシューズ洗いの話をし、保護者に向けてせっけんをすすめることができた。また交流担任に対しても自分の言葉でせっけんの魅力を話すことができ、仮説2の手立ては有効であったと考える。

(2) 今後の課題

今回の研究では、保護者に学校で直接販売する機会を設定できず、家庭で児童から保護者に購入を薦めるという活動にとどまった。そのため、家での様子を保護者に聞くことはできたものの、実際に話型に合った形で購入を薦めたり、詳しく商品の魅力を語れたりしていたかというところまで追跡できなかった。より児童にとっても購入者にとっても思いを捉えやすい販売の場を設定し、互いに語ることができるようにすることで、さらに活動を深めることができると考える。このことを踏まえ、今後も実践を続けていきたい。